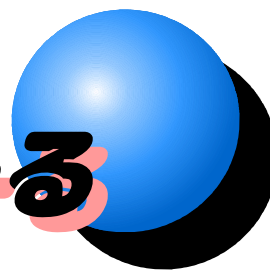




ゆい

・まーる



★VOL 1 令和2年6月3発行



絵本の楽しさをあすそ分け

■「どんなふうに見えるの？」

林木林／作 はたこうしろう／絵



子どもの好奇心をくすぐる作品。●草の上に大の字に寝そべったら地球をおんぶしているように見えるかな？どこまでも走ったら、逆立ちしたらどう見えるだろう？●4～5歳の子どもたちに、大きなスケールの世界をイメージしたら楽しいよと教えてくれる作品。林木林（はやし・きりん）さんの短い言葉と、はたこうしろうさんの絵が、地球サイズの広がり子どもたちに伝えてくれます。

■「あがりめさがりめ」

とよたかずひこ／作

親子が一緒に遊べるシリーズ。「きんぎょさん」とめだかさん」「はじまるよ はじまるよ」もあります。

●「ももんちゃん」や「バルボンさん」シリーズで子どもたち



から圧倒的な人気のとよたかずひこさんが、昔からある「あそびうた」を題材に作りました。●表情豊かな動物たちが見開きのページいっぱい大きく、動きが分かりやすく描いているので、子どもたちを自然と遊びの世界に誘います。2～3歳の子どもが親子で遊ぶとちょっとした運動にもなります。何回も遊んだら「わが家流」に遊び方をアレンジするのも楽しい！



絵本のお届けサービス
「ペンギンくらぶ」で
好評を得た1冊

■「もりのだるまさんかぞく」

高橋和枝／作

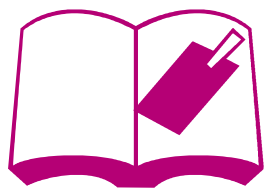
とにかく楽しくてゆかいな作品。「だるまさんかぞく うみへいく」もあります。

●森のマンションの1階に、親子4人のだるまさん家族が越してきました。2、3階に住むネズミとクマの家族がだるまさんの部屋に遊びに来たので、室内を案内します。●だるまさん家族の部屋は、特別なリフォームをしています。というのも、だるまさんは体がまん丸なので、暮らしやすくするためには家具や部屋の形を変えなければなりません。その「変わったところ」



が楽しさのキーポイント。作者の腕の見せどころです。「だるまさんかぞく うみへいく」を続けて読むと、幸せな気持ちにな

れます。●同じ作者の「りすでんわ」もかわいらしさにあふれ、おとなも読める作者のセンスが光っています。



本との出会いを

ボーイズ＆ガールズに

■「レッツはおなか」

ひこ・田中／作 ヨシタケシンスケ／絵

ひこ・田中&ヨシタケシンスケという児童文学界の強力コンビが組んだ「レッツ」シリーズ最新4作目。●1作目の「レッツとネコさん」では、レッツは3歳でしたが、ここでは5歳。●お父さん・お母さんから「レッツはお母さんのお腹の中にいた」ことを聞かされたレッツは、そのころのことを自分で考え、想像します。お母さんのお腹の中で、おへそでつながっていたこと、赤ちゃんのための部屋のこと…などなど。●5歳児のレッツの頭の中は不思議です。自分で考え、「レッツはお腹の中から今までずっとレッツ」のまま今の自分があることに気づきます。文と絵の両方が一体となり、レッツを通して自分で考えるおもしろさを体験できます。●小学生低学年からおとなまで。



■「おいかけっこのひみつ …しましまとたてがみ」

いとうひろし／作

とにかく走るのが速いライオンとシマウマがおいかけっこをします。しかし、あまりに早く走りすぎたので2頭にとんでもないことが起こります。そのせいで、まわりからはライオンがシマウマで、シマウマがライオンのように見えてしまう



ことに…。2頭は元に戻ろうとしますがなかなかうまくいきません。●ようやく元のライオンとシマウマにもどりますが、たてがみは少しずれ、しまもようは少しゆがんでしまいます。何よりも2頭は、みずからの意思で「普通」のライオンとシマウマになってしまうのです。そのことを、作者は「だいじな秘密を知ったから」と書き、答えは子どもたち一人ひとりに委ねています。●いとうひろしさんには、南の島で暮らすおさるたちの日常を描いた「おさる」シリーズがあります。どちらにも共通するのは、誰にでも分かるやさしい言葉を使いながらも、「日常の中に大事なことがあり、当たり前に見える日常が実はとっても大切」なんだということ。●低学年向けですが、中高生やおとながにも。

■「ゆかいな床井くん」

戸森しるこ／昨

ほんわかしたイラストの表紙が印象的。●小学校6年生の暦（こよみ）は、床井くんと隣の席になります。●暦が床井くんの言動を通してクラスの仲間の知らなかった一面



を少しずつ理解していく成長物語です。●床井くんは、クラスの男子の中で一番背が低く、足が速くて、勉強は苦手だけれど明るくてよくしゃべる人気者。でも床井くんのすごいところは、暦の言葉を借りると「またしても、暦は床井くんに〈やられた〉と思った。床井くんは視野が広い。暦が見ていない部分を、ちゃんと見ていて、教えてくれる」ところ。●14の短い物語が収め

られ、同級生たちが互いに思い込んでいた表面とは違うそれぞれの良さを知ることができます。●床井くんの明るさが全体に行き渡り、読みやすいので、自分と友だちの距離感に感じ始める中学年から高学年にピッタリ。

■「ナツカのおばけ事件簿 フラワーショップの亡霊」 齊藤洋／昨

シリーズ18作目。おしゃれで行動力のある小学生の女の子／ナツカがパパの助手となって「おばけ退治」をする物語。●マンガのようなページ構成で、読みやすさ・分かりやすさは抜群。●事件が解決すると、パパが事件の原因やおばけの正体を説明し、その後日談も紹介します。物語を読むのが苦手な子どもも読める親切さが魅力。●事件を解決して依頼者からもらう報酬とナツカとパパの取り分や支出を書き出した「ナツカのおばけ帳簿」の増減を見るのも楽しさの一つ。低学年から中学年に。



■「さすらい猫 ノアの伝説」 重松清／作

ある日、首に風呂敷を巻きつけた黒猫が健太・リリー・亮平たちの教室にやってきたところから物語が始まります。●風呂敷には手紙が入っていて、猫の名前は「ノア」。

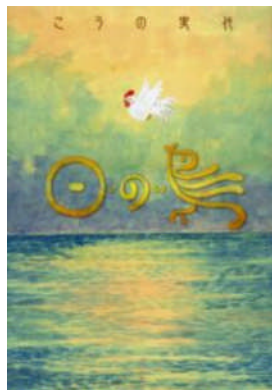
全国の学校を歩き回っていて、ノアはクラスのみんなが忘れてしまった大切なことを思い出すためにやってくるのだと、前の学校の子どもたちが書いています。●重松清さんの文は、作品に登場する子どもたちやおとなが抱える痛みや傷を少しずつ明かし、まわりの人たちの力を借りながら痛み



や傷をほぐし、修復していきます。●ノアは大事な場面で現れ、人と人を結びつけ、クラスのみんなが忘れてしまった大事なことを気づかせ、健太・リリー・亮平ばかりではなく、先生も含めたクラス全体の力で乗り越えていきます。●子どもたちの心に投げ込むストレートボールのような作品で、気持ちの良い終わり方です。高学年から中学生に。

■「日の鳥」 1. 2 こうの史代／作

あえて中学生にどうですか？と勧める。●平成23年3月11日、14時46分に起きた「東日本大震災」の5ヶ月後から4年間にわたって震災の被災地を訪れた作者が目にした情景を描き、それをオンドリに身を託して言葉を紡いだスケッチ集。震災で妻を失った（らしい）オンドリが妻のいたという痕跡をたどり、訪れた土地で目に映るありのままを、つぶやきだったり、少しとぼけた感想であったり、妻の思い出に重ねたり…とても良いさじ加減の被災地レポートになっています。本日の食事として、その土地ならではの野草がイラスト付き。作者のきめ細かな観察眼とサービス精神の表れです。●押しつけることなく、目にしたままを自然に写し取り、文を重ねる…中学生にどう伝わるのか楽しみな作品です。●できればこの史代さんの現段階での最高傑作「この世界の片隅に（上・中・下）」もどうぞ。



■「給食アンサンブル」 如月かずさ／作

学校という狭い世界のまた独特な「給食」を題材に、中学生たちにとって切実なことを6つの短編集で描き、それぞれが連動し



合う作品。●気の進まない転校で元の学校に未練があり、新しい友だちとの信頼関係がうまく築けない子。童話が好きで、無理しておとなっぽくしようとする子。愉快で明るく、運動神経抜群で大食いの人気者というキャラクターを変えようとしながらもがいている子…。●そんな悩みを給食のメニューを介し、クラスメイトとの関わりを深めて解決の階段に足をかける物語になっています。それぞれの物語の終わりに「良かった」という安心感があります。

■「うたうとは 小さいのちひろいあげ」 村上しいこ／作

主人公は、自分の意思とは関係なく短歌のクラブに入ってしまうことになった高1の女の子／桃子。●この作品の良さは、仕方なく入部した「うた部（短歌部）」の部員一人ひとりの個性の豊かさと短歌を作る醍醐味や楽しさをあちこちにちりばめているところ。●桃子といじめから引きこもりになった親友／綾美との関係が物語の大事な要素になっていますが、うた部のメンバーと短歌という心の表現方法が綾美をサポートします。●作者は、ギャグたっぷりの童話をたくさん書いていて、ここでも関西弁のノリとつつこみ・ボ



ケをうまく取り入れ、無理なく物語の世界に中高生を誘います。●ハイライトは、綾美もうた部に入り、部員全員で挑む「短歌甲子園」の県大会。物語のタイトルは、この大会で上の句として生まれ、物語の最後で下の句が誕生します。物語が完結する瞬間は感動もの。●高校生らしいたくさんの短歌を読むのも楽しく。いろいろな発見があります。舞台は高校ですが、中学生にも。

■「泣いたあとは、新しい靴をはこう」 日本ペンクラブ／編

サブタイトルは、「10代のどうでもよくない悩みに作家が言葉で向き合ってみた」。●前書きに「この本は、日本ペンクラブの作家や翻訳家たちが、逆境のなかにいるかもしれない君に向けてつむいだ言葉の集大成」とあります。●目次は7ページにわたり、子どもたちからのありとあらゆる相談や聞いて欲しい言葉があふれ、それら一つひとつに作家たちがそれに負けじと真摯な言葉（文）で応えています。一般的な人生相談の回答ではなく、作家たち自らの体験を語り、子どもたちの立場に立ちながらも自分ならこう考えるけれど、どうだろう？という提案型の姿勢は、中学生の心に響くと思います。



~~~~~ ごあいさつ ~~~~~

●「ゆい・まーる」というタイトルは、沖縄の言葉「結（ゆい）まーる」を拝借しました。沖縄には、互いに支え合う「結」という文化があり、巡る・廻る意味の「まーる」という言葉があります。●また、沖縄の音楽グループ「しゃかり」に「結まーる」という曲があり、歌詞の中に「いつの時代も／人々は／誰かを愛し愛され／与える喜びを知り／生きる意味を追いかけて／美しい明日をつくる／輝く魔法の言葉「結まーる」／特別なことはいらない／優しい温もり感じ合えば／奇跡はきっと／とても簡単」というフレーズがあります。●本の世界を紹介することでささやかながら魔法が生まれ、「互いに分かち合い・互いを思いやる」ことにつながればという思いを込めてタイトルにしました。●毎月上旬に発行します。



